

第2回 到津の森公園将来ビジョン検討会議 議事録

- 1 開催日時 令和5年10月24日(火) 13時00分から15時00分
- 2 開催場所 北九州市役所本庁舎15C会議室(北九州市小倉北区内1-1)
- 3 出席者 南 博(座長)、岩谷 かおり、西田 貴史、野田 亜矢子、村上 嗣英、山田 恵子
- 4 会議概要 (1) 到津の森公園将来ビジョン検討の進め方の説明
(2) 議題 新たな「基本理念」「基本方針」(案)について意見交換
(3) 自由討議
- 5 会議経過(発言内容)
 - 園内を高齢者から幼児までが歩くのが難しいのではないかと。他の動物園では、平らなところが多い。到津の森公園は、昔、山を切り開いて公園としているので、どうしても坂道が多い。
 - エレベーターを利用すれば園内を周るのは少し楽になったが、端から端まで移動するのは相当大変だと思う。キリンの絵が描かれたエレベーターができて、車椅子の移動も可能にはなったが、移動用のカートなど、お金はかかると思うが導入を検討してもらえたらと思う。
 - 駐車場の件について。土日となると車での来園者が多いが、バイパスまで渋滞が続くことがある。こちらもうまく解決していただければさらなる集客につながるのではと思う。
 - どういう動物園であれば自慢したい動物園だと思えるのか、その視点が必要なのではないか。それは常に我々も考えていて、どのような動物園なら、他所の人に自慢したいと思っていただけるのかを考える必要がある。
 - 子どもたちがまた行きたいと思えるような、身近に感じられる動物園であってほしいと思っている。歴史がある動物園なので、もっと子どもたちに動物園の歴史があること、かつ自然があつて動物も見ることができるということを北九州市の学校の中で話していただければと思う。北九州にはこのような動物園があるということをもっと学校からも発信していただければ、子ども達から親にもっと動物園に行こうという声が聞けるのではないかとと思う。
 - ボランティアなどでちょっとでも関わることがあれば、関わった方にとって「うちの庭」といった感覚になると思うし、そういった感覚は大事だと思う。市民の方が少しでも関わることがあれば、自分事になるかと思う。
 - 自然・環境教育施設ということだが、幼児の保育ということで、親子で楽しむ空間というのはあるか。動物ばかりでは飽きるため、おもちゃやゲームなど親子で楽しめる空間があればいいのではないかとと思う。
 - 予算が必要なハードの整備が必要である、ということは伝わるようにしないといけ

ないと思う。

- 日本は動物園が多い国だが、結局同じようなものが多くなる。人気の動物、ゾウやライオン、キリンなどがいるかどうか、都心にあるか地方にあるのかという違いはあるが、大体同じような動物が居て、立地による違いを活かした動物園もありいろいろだと思うが、具体的に書いておかなければなかなか到達できないのではないかな。自分たちの強みや色は何なのかはしっかり考えないと、打ち出すのはかなり大変かと思う。市民に愛してもらおう、市民の要望を叶えようとする、どこも金太郎あめのように同じような動物園になってしまうし、逆に独自色を出したときに市民に受け入れられるかどうか難しい。作り方は難しく、言葉にただけでは出来ない部分でもある。
- 飼育員の方が、動物の紹介板を作っているのはすごいと思う。例えばサルの紹介は、毎回紹介するが個体が変わっていくのもいいし、お客様からも好評だった。作るのは大変だと思うがあれはぜひ続けてほしい。
- 九州の北部は大陸との玄関口だと思うので、そのような地の利を活かして動物のコレクションに特色を出すのもいいと思う。地の利を生かすのは大事で、大陸との玄関口ということであると福岡市と差別化ができないかもしれないが、九州は中国や韓国からの観光客が多いと感じるし、改めてここは玄関口だったのだということ認識させられた。トータルでの博物館だと思うので、そういう点を大事にしたほうが良い。
- 強みと思いは分けて考える必要があると思っている。定性的な部分、こうしたほうがいい、というのが思いの部分で、強みは他と比べて強いという意味合になるかと思うため、客観的に数字で図れるものがあるはずである。例えば、人口当たりのサポーターやボランティアが多いとか、バランスシートが優秀であるなど、客観的数字で到津の森の強みを見付けていくことで、思いと数値の強みが繋がって、いい色が出てくるのではないかと思う。
- 立地条件は良い。市の中心部にあるということは、それを大いに生かさなくてはいけない。
- 到津の森公園にはゴミ箱がなく、はじめはポイ捨ても見られたが最近は少なくなっており、そういった点も強みになるのではないかな。
- メッセージ単体で、到津だ、とわかるような文言を入れていくのかどうか、せめて動物園であるということをメッセージとして入れるのかどうかを確認したい。現行の「市民と自然とを結ぶ『窓口』となる公園をめざす」だけでは到津の森公園であるとは分からない。かつ動物園であることもイメージは湧かない。どういう状態で載るかにもよるが、到津の森や動物園という言葉と一緒に載らないのであれば、一言で到津や動物園であることを想起させないとライティングとしては弱いと思う。

- 天王寺動物園の例は、おもしろい・あきない・みんなの動物園をめざして、ということでイメージとしては大阪であることは伝わりやすい。
- 理念について、基本的には、今まで通り市民に愛される動物園ということかと思う。客観的に見て、面積も広くなく、駐車場もなく、キャパシティもないのは明らかで、大規模に人を集めるという、そういった集客ではないが、集客を重視しないという発想はあり得ないと思っている。市民の人に気軽に何度も来てもらえないといけないと思っている。めちゃくちゃ稼げる施設になるかと言われると、必ずしもそうではないかもしれないが、大きな経済効果を生み出すというよりも、シビックプライドの醸成であるとか、北九州に愛着を持つとか、レクレーションの幅が広がり楽しみの幅が広がるといった、今の機能をいかに持続的に続けていくかが重要であり、理念としてはそういうものではないかと思う。
- 一般市民の方は、可愛いからパンダが見たい、ゾウ・キリンが見たいと要望があるかもしれないが、施設を考えたときには今後は難しいということが、動物園側にもあると思う。市民から愛される動物園を目指すのであれば、動物園から市民に対して提示し、納得してもらおうスタンスが必要だと思う。博物館とて人を集めないと言われていけないご時世で、地元や世界から人から愛されている博物館や美術館はいくらでもある。お互いの思い、中から発信することと、見に来ていただく方の思い、市民に愛されるということを全面に出すのであれば、そのすり合わせをどのようにしていくのが重要なのではないか。動物園側も市民側も考えていかななくてはいけない。